

プログラム・ノート

奥田佳道

来年のベートーヴェン没後200年を意識した7年プロジェクトが、連動するCD録音とともに好評だ。彼らが10年前の結成時に奏でたベートーヴェン、没後30年の武満徹、巧みな楽の音が舞うラヴェルへの期待も限らない。

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第6番 変ホ長調 作品70-2

第1楽章の序奏ポーコ・ソステヌートから気高い。アレグロ・マ・ノン・トロポの主部も優美で歌謡性が際立つ。1809年夏に初版譜が刊行されたピアノ三重奏曲作品70は、「幽霊 Ghost/Geist」の愛称で知られる第5番 ニ長調と、第6番 変ホ長調の2曲から成る。この2曲は、鍵盤の名手でルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が心を許した数少ない友人でもあったマリー・エルデーディ伯爵夫人に捧げられた。全4楽章。

武満徹：『ビトゥイーン・タイズ』

フレーズに息づく波のイメージ。移ろいゆく調べたち。しかし思いのほかりズミカルだ。Between(ビトゥイーン)は、ここでは波間を意味。Tides(タイズ)について武満徹(1930～96)は「海の波を暗示するとともに、季節をも意味する。多義的」と記した。「宇宙、海、古い日本の庭、石、植物」という言葉も添えながら。

今年没後30年、武満徹晩年の佳品とは喜ばしい選曲だ。曲はベルリン・フェスティヴァルの委嘱で創られ、1993年9月にベルリン芸術週間で、パメラ・フランク(ヴァイオリン)、ヨーヨー・マ(チェロ)、ピーター・ゼルキン[サーキン](ピアノ)により初演された。スコアに記された演奏時間は18分。

ラヴェル：ピアノ三重奏曲

第一次世界大戦が勃発する4か月ほど前の1914年3月に作曲が始まり、1915年1月にSMI独立音楽協会の公演としてパリのサルガヴォーで、アルフレード・カゼツラ(ピアノ)、ガブリエル・ヴィヨーム(ヴァイオリン)、ルイ・フェイヤール(チェロ)により初演された。モーリス・ラヴェル(1875～1937)の師フォーレ、友人ミヨーも曲への賛辞を惜しかなかった。

全4楽章。聴こえてくるのは、ラヴェルの母の故郷フランス南西部バスク地方への愛、そして舞曲と民謡への想い(第1、第4楽章)だが、パリ万博などで出逢った東洋への関心(第2楽章)、それにバロック的な葬送音楽(第3楽章)も大いなる美質となる。なお第1楽章はソルツィーコという古いバスクの舞曲リズム(8分の5拍子と8分の3拍子のミックス)で書かれ、第2楽章の「パントゥム」はマレーシアの詩の韻を指す言葉である。筆致は精妙かつ大胆で、多彩な音色、リズムを浮き彫りにする高度な技が必要だ。

(おくだ よしみち・音楽評論)